

医の道 を志す者へ

長崎県医師会常任理事

草場 泰之

Kusaba Yasuyuki

プロフィール 1946年生まれ。長崎市出身。
1970年に長崎大学医学部泌尿器科学教室に入局。
1986年から日本赤十字社長崎原爆病院勤務。
2002年から長崎県医師会常任理事に就任。
学術・生涯教育、勤務医、産業保健、
医療紛争を担当。



日本最古の医書といわれている、平安時代の『医心方』には、「大慈惻隱の心」をもって医を行うべしと書かれている。「大慈」とは仏教、「惻隱」とは儒教の教えをよりどころにしていて、医師は仏のような大きな慈悲をもって、病人を深く憐れみ、悲しみの心をもちなさいと説いている。

江戸時代になると、貝原益軒は養生訓の中に「医は仁術なり。仁愛の心を本とし、人を救うを以て志とすべし」と書いている。いわゆる、医は仁術なり」という有名な格言がここに書かれていて、その後全国にその言葉は広まった。

1857年に、軍医ポンペは日本海軍派遣要請に応じて、長崎に来て医学校を開校し、5年もの間、全身全霊を注ぎ込んで、医学の講義、実習を行ったが、ポンペが残した言葉として、「医師は自らの天職をよく承知していなければならぬ。ひとたびこの職務を選んだ以上、もはや医師は自分自身のものではなく、病める人のものである。もしそれを好まぬなら、他の職業を選ぶがよい」と説いている。非常に厳しい言葉である。

小さい時から、一生懸命勉強し、受験で苦労して医学部に入學し、少なくとも6年間医学を学び、医師国家試験に合格し、やっと医師になる。しかし、

それは「ゴール」ではなく、「スタート」である。過去の多くの師の教訓をしつかり胸に抱いて、非常に厳しい医の道を極めなければならぬ。

だから、ただ勉強ができるから、医学部に入ったのでは許されない。医の道を進むは「きり」とした動機、崇高な目的がなければならぬ。そうでないと途中で挫折してしまつてしまう。

なぜなら、今、日本の医師を取り巻く環境が、あまりにも厳しい過ぎるからである。最善をつくしても結果が悪ければ、医療訴訟となるケースが増え、裁判での判決が出るまでに多くの時間と労力と費用が費やされている。

日本の医者にはあまり恵まれない待遇の中で、いつ訴えられるかわからない恐怖を抱きながら、患者さんの治療に当たっている。しかも、医は仁術であるという精神を必死で守りながら。

医者は高額所得者で、優雅に暮らしているというのは誤解である。現実には悲惨で過酷な労働条件で働かなければならぬのである。

今多くの医師たちは、自分が好きな仕事をしていられるという満足感だけで、何とか生き甲斐を見つけて、必死にがんばっている。

このようないばらの「医の道」を進むには、燃えるような熱い志と確固たる信念が必要なのである。

